

兵庫陶芸美術館 開館20周年記念特別展  
「丹波焼の美—田中寛コレクションを中心として—」  
2025年12月6日(土)～2026年2月23日(月・祝)



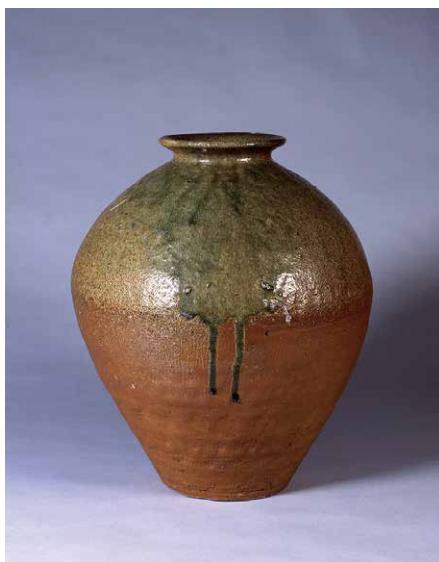
兵庫陶芸美術館  
学芸員 萩原 英子

兵庫陶芸美術館は、全但バス株式会社の当時社長の田中寛氏（1904～81）が昭和41（1966）年に創設した「財団法人兵庫県陶芸館」からの寄贈および購入による陶磁器を中心として、平成17（2005）年、丹波焼の里に開館しました。この田中氏のコレクションは、丹波焼をはじめ、兵庫県内でつくられたやきものを中核とし、当館ではこれを「田中寛コレクション」と名付け、広く公開しています。

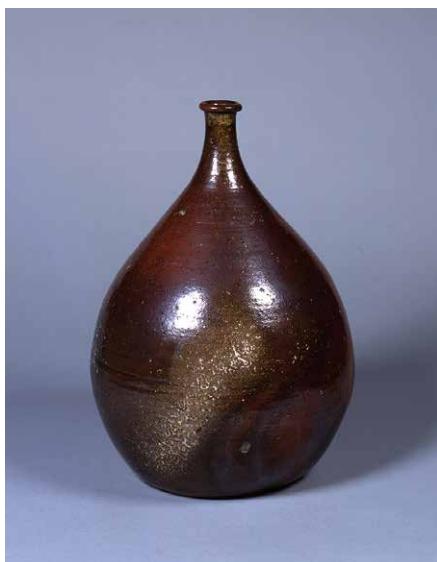
コレクションの大半を占める丹波焼は、平安時代末期に常滑焼（愛知県）など東海地方の窯業技術を取り入れて誕生し、中世には壺・甕・擂鉢を中心として無釉の焼締陶器を生産しました。この時期につくられたものは、焼成によって茶褐色に発色した土肌や窯の中で燃料の薪の灰が器肌に降りかかり、それが溶けてガラス化することによって現れた鮮緑色の自然釉が見どころとなっています。

近世には、窯窓から登窓へと窓の構造が転換するとともに、土部の塗土や灰釉などの施釉が行われ、多彩な装飾技法が展開されました。江戸時代前期には、赤茶色に発色する赤土部や縁がかった褐色の灰釉が器面を彩りました。江戸時代中期には、茶色の栗皮釉や漆黒の石黒釉が施されました。また、江戸時代後期には、精緻な薄手の器に白土を塗土した白丹波が生み出されました。各時代の求めに応じて変化してきた丹波焼は、平成29（2017）年に日本六古窯の一つとして日本遺産に認定され、平成30（2018）年には田中寛コレクションの丹波焼が兵庫県指定重要有形文化財に指定されました。

開館20周年を迎えるにあたり、特別展「丹波焼の美—田中寛コレクションを中心として—」を開催し、当館コレクションの母胎である田中寛コレクションを広く紹介するとともに田中氏が情熱を注いで現代に受け継いだ丹波焼の魅力に迫ります。



丹波 壺  
室町時代中期（15世紀）



丹波 赤土部徳利  
江戸時代前期（17世紀）



丹波 色絵桜川文徳利  
江戸時代後期（19世紀）

※所蔵はすべて兵庫陶芸美術館（田中寛コレクション）兵庫県指定重要有形文化財